

感性、物づくり、物語 — 共感の世界の広がり と 繋がりを考える — (全 12 回)

第 11 回 感覚の体性感覚的統合から共感へ

長島知正 (早稲田大学理工研招聘研究員)

1. はじめに

前回、人間の感覚を、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚という、いわゆる五感から、触覚を中心にした「体性感覚」などの感覚に分類を見直すことを介して、「共感」がおきるいとぐちを考察しました。今回、その延長上に、20 世紀初頭哲学の分野で導入された「諸感覚の体性感覚的統合」と呼ばれる、人間の身体を重視した見方や共感との関係などについて検討します。

2. 身体性と人間像の変化

今迄この連載では、近代化社会において忘れられた、感性や共感という観念をどのように把握するかについて、近代化の歴史を生み出した西欧にその起源を求め、検討してきました。そのため、17 世紀から 18 世紀の西欧の思想家達の感性に関する考えを尋ねるといって道を通ってきました。その結果、西欧における感性の生い立ちや位置づけなど、少ないとはいえ成果も得られました。

しかし、本書の最終的ゴールは、文系の学問ではなく、人間の感性に訴える新しい物作り、つまり新しい工学の基盤にあることを忘れる訳にはいきません。そのため、私たちの目標とする感性に訴える新しい物作りの基盤は果たしてそうした近代西欧の時代の思考の中に見いだせるのかを問い直す必要があります。

理系の方法として感性の問題に立ち向かうのは未だ先の話としても、その前段階の問題として、デカルトやカントの哲学に対する著者の違和感をここでとり上げます。端的に云えば、それらの思索は、人間の「認識」を問題にしてはいても、人間像として、リアルになっていかないといった事に関係します。それは、人間のリアルな認識を捉えているのだろうかという感性の問題にも繋がる、素朴な疑念にも通じています。

デカルトやカントの思考の限界ないし欠陥を別な面から指摘することもできます。近年の言葉で言うと、「身体性」と呼ばれている概念です。この「身体性」という概念は、カントに代表されるいわゆる「観念論」の議論には本質的に欠如した人間の身体に基盤を置く思考によって、リアルな人間像に迫ると云えるでしょう。

誤解を恐れず手短かに云えば、カントなどの近代の哲学はじっと静止して思索する、つまり、「じっと考えてから行動する」のに対し、今回取り上げている身体性を前面に据える 20 世紀の哲学では、人間とは、行動しながら考える生きものであると捉えると云えましょう。こうした見方をした代表としてメルロ・ポンティの名がよく知られています。

18 世紀のカントと 20 世紀のメルロ・ポンティを直接比べるなど乱暴すぎると云われるかも知れませんが、そこには、今日の私達に通じる人間像の大きな変化が認められます。当然、ひとり哲学に留まらず、その影響は人間社会全体に及ぶはずのもので、この変化は実に大きなものと思います。しかし実際には、哲学分野でのこの大変化は、果たして他の領域にどれほど伝わっているのでしょうか？

「身体性」という言葉はある程度流布していますが、その概念は、例えば理系の分野で浸透というより、余り検討もされてはいないように思われます。むろん、そうしたいわば思想レベルでの概念が実際工学などの分野で役立つことを意味しませんが、人間とモノの新たな関係を構築する上で、身体性は検討に値する課題を提供していると考えられます。

以下では、「身体性」の概念に「体性感覚による感覚の統合」という見方から接近出来ることを示します。

3. 感覚の体性感覚的統合

前回、体性感覚という感覚を導入しましたが、いわゆる五感という分類を見直して、新しい分類を導入する理由はなんだったのでしょうか。詳しいことは分かりませんが、次のような理由も関係していると推測されます。まず、視覚、

聴覚、触覚、嗅覚、味覚の五感は通常それぞれ互いに独立な感覚と思われていますが、果たして本当にそうなののでしょうか。例えば、文字という目を介した視覚言語と音という耳を使う聴覚言語が同じ言葉として同時に成り立つのは何故か、という問題があります。また、各感覚は外部からの刺激に対するそれぞれの感受性とされています。つまり、感覚は受動的なものとされます。こうした感覚の受動性はカントなどの近代的な認識論において基本的な前提となっています。一方、認識と人間の行為や行動との間に溝をもたらし、両者は隔てられて、全ては大脳の新皮質の機能に委ねられる状況が生まれました。多くの事が脳の研究に依存するとしても、基本的方向は脳研究と云う具体的なものとは別に、基礎的な思索から生まれることは歴史が示しています。

近代西欧の見方は、私達人間は外界を認識し、それに基づいて行動しているというものですが、もし、人間は多くの動物と同様に、先ず行動があって、認識や知覚は其の後に続くとする、ということになるのでしょうか。既に見てきたように、西欧の近代化は、このような人間を動物と同じとみる見方を強く否定し、人間のみが理性を持つ特別な存在としてきた訳ですが、それを否定したらと問うた訳です。

ここでは、人間の行動、つまり運動を考えることが必要になります。ここで、いわゆる五感には運動に関わる感覚が含まれていないことに気付かれるでしょう。前回導入した体性感覚を思い出せば、それは触覚をはじめとする皮膚感覚と筋・骨格系による運動感覚によって構成されています。体性感覚(体感)の名称は五感の内、視覚、聴覚、嗅覚、味覚の感覚器官は人間の顔面に配置されていることに対し、触覚などの皮膚感覚と運動感覚を担う筋肉や骨が(顔面を含む)身体全体に分布していることに由来するのでしょうか。

触覚は日本人の感性を代表すると云えるものです。毎年春になれば日本各地、桜の木の下で繰り広げられる観桜会にそれは現われています。実際、お花見に加わる人達は、数多くの満開の桜が醸し出す空気に包まれること、つまり、桜を見ると云うより、桜の空気感に包まれて、その空気に触れることを満喫しているのでしょうか。

ここでは、日本人の感性の問題より更に基本的な問題を考えます。それは、

体性感覚とは単に触れるという触覚ということに留まらない感覚としての機能がある事に関係します。つまり、体性感覚には、触覚の他、五感にはない運動感覚が含まれるということから、人間の行動と結びつくのです。むしろ、人間はまず行動するという人間観では不可欠となります。

触覚と運動感覚が一緒になっていることは、どんな意味があるのでしょうか。その典型的な例として、触覚は運動と協働することによって、ものを見る機能を持っている事を挙げられます。それは、私達が暗闇の中でも、自分の周囲にあるものを触れることによって移動できることや、熟練の釣り師になると、釣竿を動かすことによって、釣れた魚の大きさや形も知ることが出来るといった例があります。また、実際の工学・技術の話として、熟練した技術者の指先の感覚が健常者の目や機械でも識別できないような微細な異常や差異を検出し、それがレンズなどの微細加工技術を支えているという例もあります。

つまり、触覚は単に触るという感覚ばかりでなく、運動感覚と協働して、見るという役割を果たしている訳です。見ると云うことは、モノの形などを知覚するため、様々な視覚的情報を総合する働きを果たしていることを認めるなら、体性感覚も総合的な知覚的働きをしていると考えられるでしょう。

ところで、通常、外界の認識では、外界からの刺激が感覚器に与えられ、それが神経パルスに変換されて大脳に伝わり、大脳で処理をされることによって認識が形成されると思われています。また、それぞれの感覚器官は別々の刺激受容を行う特異的な系であるので、感覚情報は互いに独立し、相互に影響は及ばないとされています。

感覚には、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、圧覚、温覚、冷覚、痛覚、筋肉感覚、運動感覚、内臓感覚があることは既に述べました。これらの感覚の中、上から四番目までが「特殊感覚」、続く八個が「体性感覚」、最後が「内臓感覚」ですが、上から下に進むに従い、外部感覚から内部感覚へ、即ち外部対象を感受することから身体内部の感受に及ぶことを示しています。ここで、体性感覚の内、触覚、圧覚、温覚、冷覚、痛覚などは身体表面の感覚、また筋肉感覚、運動感覚は体内深部感覚であることから、表面感覚は視覚や聴覚などの外部感覚と結びつくことによって外部世界に開かれると共に、深部感覚は内臓感覚な

どと結びつき身体深部にも繋がっています。

このように外部世界にも、内部世界にも繋がる体性感覚の性質から、運動を伴った感覚や知覚の能動性における身体の役割を把握することが可能になります。つまり、実際の人間の感覚・知覚は運動に伴っていますが、そうした運動している際に働く感覚、即ち能動的な感覚や知覚が捉えられます。能動的知覚とは、メルロ・ポンティよれば、運動感覚を外部世界に潜在的に関わらせる身体の身構えの事とされます。つまり、運動している際の感覚や知覚では、いちいち止まって認識してはいられない。次々に起こる変化に対応していくため、能動的な知覚を必要とする。能動的知覚は、状況に応じて記憶から意味を選んで思い出すことと考えられ、それを実際に担うのは身体が「身構える」ことによってなされると云うシナリオが考えられた訳です。

五感の体制的統合とは、このような身体運動を可能にする体性感覚を中心に五感を統合することを云います。このことによって、私達は、外部の意味をもった知覚、外界と自己の関連付けや能動的行動などが初めて可能になると云うことも出来るでしょう。この体性感覚による統合の働きは、カントなど近代の哲学には本質的に欠けている、身体の行動における意味を示しており、今後さらに広い分野で検討されることが望まれます。

ところで、現状では、「共感」という考えには幅があり、そこへ至る道も一筋ではありませんが、基本的な性質を明らかにするため、以下の考察を加えます。

先ず、体性感覚は上で説明したように、私達の身体を中心に、外部世界と内部世界をまとめる働きを可能にしますから、当然、私達のテーマである「共感」にも関連します。むしろ、私たちが他者に共感するためには、体性感覚を必要とするといえます。また、こうした体性感覚による五感覚の統合によって、私たちは、様々な感覚がバラバラに起きることなく、一つのまとまった世界として認識できる基盤が与えられたと考えることができます。

さて、上の体性感覚による感覚の統合に関係している概念として、共通感覚があります。

共通感覚については、既に簡単にですが説明してあり、ここではカントによ

る共通感覚の議論を手短に紹介します。

4. カントの共通感覚と美的判断

カントと云えば、純粹理性批判が最も有名ですが、ここでは、それとは別の著書「判断力批判」で行っている議論を取り上げます。なお、この著書は彼の三批判書の最後に出版され、カント晩年のものです。判断力批判は純粹理性批判とは対照的な書きっぷりで、読み始めるための敷居は高くはありません。また、この書の大きなテーマが美的判断に関わる趣味判断ということもあって、話題も広く、意外性がありオモシロイものです。技術論や天才論などが取り上げられていて、理系・技術系の人にもお薦めといえます。あのカントが、といった印象をもつ人も多いのではないのでしょうか？

共通感覚の話題に話を移しましょう。

カントは趣味判断の一種として美的判断、つまり「このバラは美しい」という問題を考えます。その中で、有名な「美の無関心性」という美学の古典とされる概念が展開されています。しかし、その議論には、自分が快を感じる時、それは他者にも強制されなければならないという、パラドキシカルな論理が現れ、理解にははなはだ難渋します。デュルーズの考えによれば、理解の鍵になるのは共通感覚（センスス・コムーニス）ということになるようで、以下のように解釈します。カントは共通感覚の意味について、いわゆる今日的な常識（コモン・センス）という意味を否定し、アリストレス由来の共通感覚の理念から、異なる能力が一致し共通するという意味で、共通感覚を捉えます。その上で、彼は共通感覚を美的判断の前提として捉え、その共通感覚は認識能力の自由な戯れ、つまり、構想（想像）力と規定されない悟性（知性）が偶然に一致することから生まれるとします。その一致によって、無関心な快の感情が感じられ、そうして得られる快感情は他人に伝達可能であるはずと云うのです。

こうして、快感情の伝達可能性を通じた「美」という認識の普遍性が捉えられています。現象的には、確かに、個人の感じた快感情が他者に共有されていますが、これを「情報の伝達」というカテゴリーに入れるべきか否かは、別の

議論を必要とすることになるでしょう。

上の共通感覚の意味は、アリストテレスの考えた“狭い意味”の共通感覚、即ち五感をまたがって、それらを統合する感覚とは異なっています。いずれ、共通感覚の定義はどこまで広げられるかについての問題と併せ、論点を整理し、更にすっきりした議論にしていきたいと思います。